

ペーター・フォン・コルネリウスによるグリュプトテーク
「神々の間」「トロイアの間」の装飾について

おちあい ももこ

落合 桃子 (福岡大学)

発表要旨

14
時
10
分
|
14
時
50
分松ヶ崎・東キャンパス内
60周年記念館
1F記念ホール

ナザレ派の画家として1811年から19年までローマで活動していたドイツ人画家ペーター・フォン・コルネリウス(Peter von Cornelius, 1783-1867)は、1818年にバイエルン王国の王太子ルートヴィヒ(1825年にルートヴィヒ1世として即位)の命を受け、ミュンヘンのグリュプトテーク(古代彫刻館)「神々の間」「トロイアの間」及び小玄関ホールの装飾を行った。1830年の開館前に完成したフレスコ画は、ルートヴィヒ教会の装飾などと共に、画家の代表作に位置付けられているが、1944年に空爆で破壊され、今日現存していない。フレスコ画のためのカルトンや現存時の写真、文献資料などによって、その姿が知られる。

フォン・アイネム(1956年他)とビュットナー(1980年)によってフレスコ画の制作経緯や装飾プログラムが検討され、哲学者シェリングや16-17世紀イタリア絵画などとの関連が指摘されてきた。2004年には42枚のカルトンがまとめて公開され、本装飾について考察する土台が整いつつある。本発表では、これらの先行研究を踏まえつつ、博物館の展示空間・作品との関係や当時の評価などを考察することで、本作品の同時代的な意味解釈を提示する。

宮廷建築家クレンツェ(Leo von Klenze, 1784-1864)によって設計されたグリュプトテークでは中庭を囲んで14の部屋が配置されている。開館時の図録によれば、計328点の彫刻作品は、入口左の部屋から時計回りに、エジプト彫刻、アルカイック期の彫刻、ギリシャ彫刻、ローマ彫刻の順に展示され、「近代の間」と名付けられた最後の部屋にはルートヴィヒ1世やナポレオンの胸像が配置されていた。古代彫刻の流れが同時代の為政者へと至る展示となっていた。

「神々の間」と「トロイアの間」は、こうした展示空間全体の中心部に位置する「祝祭の間」であった。「宇宙の神話」と「英雄物語」を描くというクレンツェの提案もあり、前者の天井画と三面のリュネットには、四大元素と四季、一日の四つの時などが古代ギリシャ・ローマ神話の神々によって表され、後者のそれらにはトロイア戦争の物語が描かれた。

同時代人の評価を示すものに、フレスコ画完成記念としてシュノル・フォン・カロールスフェルト(Julius Schnorr von Carolsfeld, 1794-1872)らによって制作された透かし絵(Transparentgemälde)がある。残された模写から、玉座のゲルマニアの横に立つルートヴィヒ1世と、ギリシャ芸術・イタリア芸術から戴冠を受けるドイツ芸術の寓意像が描かれていたことがわかる。

以上のことから本発表では、本装飾が、グリュプトテークの古代彫刻を包括する世界観の表現であると同時に、万物と歴史を統べる者としての国王ルートヴィヒ1世を礼賛するものであり、ドイツ芸術の一つの到達点と見なされたことを明らかにする。